

鳥インフルエンザワクチン接種の想定される主な論点

資料 3

項目	論点	参考(フランスの場合)
◎接種スキーム	予防的ワクチン接種をどのように行うか	予防的ワクチン接種
◎接種家さんの把握 ワクチンの管理	接種家さんを把握する必要があるか ワクチンの保管、数量管理等を行う必要があるか、誰が実施するのか	適切な接種・サーベイランス・行政監督を担保するため、注文量・使用量・非使用量・接種家さんの移動情報等を記録するシステムを整備
◎使用ワクチン	接種の容易性、必要量入手可能性、ブースター接種の要否から、効果が期待されるワクチンのうち、どのワクチンを使用するのが適当か	・Volvac B. E. S. T. AI+ND® (HPAI H5抗原のサブユニットワクチンとニューカッスル病の不活化ワクチンの混合ワクチン) ・CEVA RESPONS AI H5 (HPAI H5 mRNAワクチン)
接種対象	国内の採卵鶏農場の全てを対象とするか、一部とするか	コルシカ島を除くフランス全土のアヒル商用農場 (250羽以上)
接種場所	新たに導入する鶏に効率よく免疫を獲得できるようにするためにはどのような接種が適当か ブースター接種が必要か	・1日齢及び3～4週齢で接種 ・10日齢及び28日齢で接種 (長期間飼養するものはさらにブースター接種も実施) 等
接種者	誰が接種するか	公的獣医官の監督の下、家さんの所有者や従業員も接種可能。 (当局が権限を委任することで、農場の衛生獣医師(民間の獣医師)も公的獣医官として業務を行うことが可能)
接種費用	費用対効果はどの程度か 費用を誰が負担するか	1年間の接種キャンペーン全体(接種後のサーベイ等も含む)で約1億ユーロが見込まれ、その85%を国が負担(2年目は70%)
◎サーベイランス	全接種鶏群でのサーベイランスを前提に、頻度や検体数、検査法をどう設定するか 誰が採材や検査を行うのが適当か、検査のキャパシティはどの程度か ワクチンがテイクしているか確認するための抗体検査の要否・手法	・強化パッシブサーベイランス(所有者等が毎週5羽のスワブを採材し、認定民間ラボがリアルタイムPCRを実施) ・アクティブサーベイランス(公的獣医官が毎月60羽のスワブ、20羽の血液を採材し、承認公的ラボがリアルタイムPCRを実施)
◎野外株モニタリング*	分離ウイルスの性状解析を行い、ワクチン株と野外株の適合性の確認が必要となる。また、結果に応じてワクチン株の変更が必要だが、誰が実施するか。ワクチン株は柔軟かつ迅速に変更可能か	ワクチン株と野外株の適合性を確認するため、継続して分離ウイルスの性状を解析し、必要に応じてワクチン株を変更
◎発生時の防疫措置	全羽殺処分すべきか。移動制限は必要か	全羽殺処分
輸出への影響	輸出先国(香港、シンガポール、カンボジア、台湾等)と事前協議が必要	米国、カナダ、英国、日本等が輸入停止
輸入への影響	ワクチン使用国からの生鮮家さん肉・食用卵等の輸入解禁を求められる可能性	

◎技術検討会で議論する論点